

氏 名	廣田 麻子
学 位 の 種 類	博 士（英文学）
学 位 記 番 号	文博乙第 12 号
学位授与の年月日	令和 2 年 3 月 16 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当 文学研究科 英文学専攻
論 文 題 目	シェイクスピアと西洋古典文学 詩的想像力の源の研究
論 文 審 査 委 員	主査 教授 丸橋 良雄 副査 教授 湯谷 和女 副査 教授 樹下 文隆

論文の要旨

本博論は、近代初期の劇作家であり詩人でもあるウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）の劇的あるいは詩的想像力の源に西洋古典文学があると考え、シェイクスピアが西洋古典文学をどのように受け継ぎ、また改変したかを研究したものである。シェイクスピアはじつにさまざまな先行作品をその劇作あるいは詩作の材源として用いている。それらの作品の英訳を網羅した先行研究はジェフリー・ブロー（Geoffrey Bullough）によってすでになされているが、材源を原文で読み解いて詳細に比較検討した研究はわが国ではほとんどなされていない。シェイクスピアが受けた古典語教育の質を考えると、シェイクスピアはラテン語やギリシア語の原典もある程度読んで理解していたと考えられる。従って、シェイクスピアの作品研究をする際微妙なニュアンスも考慮にいれる必要から、原文に直接当たることは不可欠であると思われる。

本博論の目的は、材源だと考えられている作品を原文で正確かつ緻密に読み解き、シェイクスピアがそれをどのように自らの作品に巧みに取り入れたかを綿密に検証し、彼の詩的想像力の巧みさを論証することにある。本博論の構成は全 9 章および序章と結論からなり、以下各章の要旨を簡潔に述べる。

序章

夏目漱石作の『三四郎』にも三四郎が『ハムレット』を観劇したさい、役者が「急にアポロなどを引き合いに出して、呑気に遣ってしまう」ことに対する違和感が描かれている。幼少期から西洋古典に親しみのない日本人からすると、シェイクスピア劇の分かりにくさは三四郎が感じたように、しばしば西洋古典の神々に言及する台詞にある。ところがそのような古典の神々に言及する場というのは登場人物の気持ちが高ぶって、溢れる感情が言葉となってほとぼしるところであることが多い。本博論では、とくにシェイクスピアの詩や劇において作者が西洋の古典に言及している場面を丹念に考察し、溢れんばかりの情感を英語で巧みに表現したシェイクスピアの詩的想像力の源を、西洋古典の原典と比較検討することにより明らかにする。

第1章 詩人の老い：シェイクスピアのソネット 73 番におけるオウィディウスの影響

シェイクスピアのソネット 73 番では、人の一生と一年の季節が二重写しになる。人の一生を一年の季節の移り変わりにたとえる伝統は、オウィディウスの『変身物語』に見られる。四季の移り変わりと人生を比較するにあたってオウィディウスは、各季節、人生の各時期を不均等になめらかに語る。また、たとえるものととえられるものは明確に区別されない。シェイクスピアもソネット 73 番において、人の生涯が季節にたとえられるとはいわず、唐突にわたし（＝詩人）の姿に「一年のうちのあのとき」が重なるという。それは大胆な試みのように見えて、じつはオウィディウスの伝統を踏まえていると考えると、大胆な中にもシェイクスピア特有のなめらかさがきわだつ。シェイクスピアはソネット 73 番において、オウィディウスの『変身物語』をふまえながら、自由でなめらかな比喩の流れという詩の技法を英語で独自に発展させている。

第2章 「愛の書物」：『ヴェローナの二紳士』におけるヒーローとリアンダー

シェイクスピアの『ヴェローナの二紳士』の1幕1場で、ヴェローナの紳士のひとりであるヴァレンティンが「愛の書物」を口にする。この書物の原型は、ウェルギリウスの『農耕詩』第3歌、オウィディウスの『名婦の書簡』第18歌にあると考えられる。本章では『ヴェローナの二紳士』をこれらの材源と比較して、シェイクスピアのドラマトゥルギーの独自性を指摘した。すなわちシェイクスピアは「愛の書物」をパロディー化して、ウェルギリウスやオウィディウスに倣いながら、恋する男リアンダーの役割を女性のジュリアに担わせるという大胆なドラマトゥルギーを用いたと考えられる。

第3章 天来の詩のちから：『ヴェローナの二紳士』におけるオルペウスの堅琴

シェイクスピアの『ヴェローナの二紳士』の3幕2場に、ヴェローナのもうひとりの紳士であるプローティウスがシューリオーに求愛の仕方を教える場面がある。シェイクスピアはプローティウスにオルペウスの名を語らせるに当たって、少なくとも二つの作

品を参照していたと思われる。ひとつはウェルギリウスの『農耕詩』第4歌、もうひとつはオウィディウスの『変身物語』第10歌である。本章では、『農耕詩』のオルペウスはカタログの手法を用いて重層的に情感を込めて描かれ、他方『変身物語』のオルペウスは感情を抑え理知的に描かれていることを指摘し、それらに対してシェイクスピアのオルペウスはリヴァイアサンとともに独自の愉快的図に描かれていることを指摘した。

第4章 ジュリエットの幼さ：マクミラン版バレエ『ロミオとジュリエット』におけるシェイクスピアとオウィディウス

シェイクスピアの戯曲はのちの芸術家たちのインスピレーションを刺激し続けている。ときにはのちの時代を生きるさまざまな芸術家たちの目を通して、シェイクスピアの想像力に気づかされることもある。そのような例はシェイクスピア劇のバレエへの翻案にも見られる。そのひとつであるケネス・マクミランのバレエ『ロミオとジュリエット』が観客に強烈に印象づけるのは、ジュリエットの幼さである。このジュリエットの幼さをシェイクスピアの原文に探ると、ジュリエットがパエトンの無謀な勢いに憧れる3幕2場冒頭の台詞に書き込まれていることがわかる。この台詞は、オウィディウス『変身物語』第2歌をふまえている。その台詞を語るジュリエットは、パエトンにまつわる神話の全体像について知っていても知らぬふりをし、話の一部だけにこだわって自分に都合のいいようにしか考えない。そのようなジュリエットの態度は、子ども特有のわがままである。後先のことを考えず突き進むジュリエットの恋の狂気は、オウィディウスの描く神話世界の壮大な悲劇と響きあって、『ロミオとジュリエット』の悲劇をより一層壮大なものにする。すなわち、神話世界に迫りくる世界の火事とユピテルの怒りとあいまって、自身の死が迫りくることが、ジュリエットの幼さの中にひそかに書き込まれている。そしてマクミラン版バレエ『ロミオとジュリエット』は、シェイクスピア劇が神話と響きあって悲劇を増幅させるという大切な場面に気づかせてくれるアダプテーションとなっている。

第5章 「涙ぐましくもおかしき一場」：『夏の夜の夢』における余興ピラマスとシズビーと『変身物語』のピューラムスとティスベー

シェイクスピアの『夏の夜の夢』における余興「ピラマスとシズビー」は、古代ローマの詩人オウィディウスの『変身物語』の「ピューラムスとティスベー」を下敷きとして創作されている。オウィディウスの原文において重要な役割を果たす「壁」、「月光」、「血」、「桑」について、オウィディウスとシェイクスピアの表現を比較すると、オウィディウスの詩の持つ直截性を、シェイクスピアはだじやれに変換したり、言い間違いによる言葉遊びに変換していることがわかる。オウィディウスの詩の切羽詰まった哲学的な叙情を、シェイクスピアは余裕のある笑劇に仕立てたのである。

第6章 「うわさ」:『ヘンリー四世・第2部』序幕の‘Rumour’とウェルギリウス『アエネーイス』第4歌の‘Fama’

シェイクスピアの『ヘンリー四世第2部』には、1幕が始まる前に序幕(Induction)があり、その序幕でただひとり「うわさ」(Rumour)が登場する。この「うわさ」の材源は、ウェルギリウスの『アエネーイス』の第4歌に登場する‘Fama’「うわさ」にある。両者を比較すると、‘Fama’には羽、目、舌、口、耳がたくさんあるが、‘Rumour’は舌ばかりであることが看取できる。シェイクスピアは『アエネーイス』の‘Fama’「うわさ」をふまえて‘Rumour’「うわさ」に作り変えている。シェイクスピアによるこのような改変は、ノーサンバランド伯にその家来のモートンがシュルーズベリーの戦いの知らせをもたらす場面や、騎士フォルスタッフがゴールトリーの森で反乱軍のコルヴィルを捕虜にする場面など、劇作の上で重要な場面をより一層悲劇的に示すうえで有効であると論じた。

第7章 リアnderの「こむら返り」:シェイクスピアの『お気に召すまま』とムーサイオスの『ヘーローとレアンドロス』

シェイクスピアの『お気に召すまま』の4幕1場に、ヒーローとリアnderの悲恋譚が示唆される場面がある。その材源と考えられるのが、ギリシアの詩人ムーサイオスによる小叙事詩『ヘーローとレアンドロス』である。この作品を詳細に検証すると、ムーサイオスは折り目正しく典雅な詩の中にひそかに生々しいエロティックな比喻を書き込んでいることが読み取れる。そしてシェイクスピアはそこからイメージを取り入れ、パロディー化することで滑稽味を出していることがわかる。ギリシアの悲恋譚を原文で読まないといくみ取れないような密かな比喻を、シェイクスピアはパロディー化して悲恋譚を喜劇に作り上げていると指摘した。

第8章 「希薄な空気のなかへ」:シェイクスピアの『あらし』とウェルギリウスの『アエネーイス』第4歌

シェイクスピアの『あらし』のプロスペローの台詞に‘into thin air’という表現が見られる。これは「雲散霧消する」とか「跡形もなく消える」というようなときに使われるが、『あらし』という作品を書いていた時、シェイクスピアはあきらかに西洋の古典であるウェルギリウスの『アエネーイス』第4歌をふまえて‘into thin air’という表現を用いている。ウェルギリウスの『アエネーイス』第4歌に見られるラテン語表現‘intenuem . . . auram’には、メルクリウスの特別な神秘があらわされる。すなわち、メルクリウスは眠りを与えたり奪ったりするのみならず、生と死を支配できる神である。そのメルクリウスの神秘が、夢と眠りと魔術と目覚めが渾然一体となる『あらし』に響きわたることを論証した。

第9章 魔術から音楽へ：メーデИАとプロスペロー

シェイクスピアの『あらし』の5幕1場のプロスペローの呪文は、オウィディウスの『変身物語』第7歌にあるメーデИАの呪文から引用されたものである。両者の呪文を原文に当たり詳細に比較検討した結果、プロスペローの呪文は、その詩のスタイルにおいてメーデИАの呪文に似ているが、内容的にプロスペローの目指す方向性はメーデИАのそれとは逆であり、プロスペローは魔術を捨てて音楽を求めている。シェイクスピアはプロスペローの呪文に古典の魔女をふまえることにより、人間が魔術を捨てるという行為をドラマチックな形で処理した。古典の魔女を人間の魔術師に投影させ、イギリス土着の風土を呪文に書き込むところに、シェイクスピアの詩的想像力の巧みさを認めることができることを指摘した。

結論

西洋古典の材源とシェイクスピアの作品との間には同質性と異質性がある。ある程度同質性があるからこそ材源であると考えられるのであるが、まったく同質であればそれは単なる模倣となる。そこでシェイクスピアは古典と対峙するとき、言語の境界を乗り越え、自由自在に改変をくわえ、独自の詩情や機智やユーモアを自分の作品の中に盛り込んだのである。そこには時として巧妙な物語や、人間の愚かしさを楽しむ態度や、愛と女性に対する興味や、懐疑的な気質や、憎しみを乗り越え人を許すことのできる人間の寛容さを見いだすことができるのである。シェイクスピアの詩的想像力の豊かさと独自性はまさにそういうところにあると思われる。

審査結果の要旨

廣田麻子氏は博士論文に代わるものとして、単著『シェイクスピアと古典文学 詩的想像力の源の研究』を昨年の7月に出版した。全9章に加えて序章と結論からなり、目次・参考文献等も含めて総頁数は215頁に及ぶ。本博論は、英国を代表する偉大な劇作家であり詩人でもあるウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の詩的想像力の源を西洋古典文学に探ろうとする試みである。すなわち、シェイクスピアが西洋古典文学をどのように受け継ぎ、また改変したかを研究したものである。シェイクスピアはじつにさまざまな先行作品をその劇作あるいは詩作の材源として用いて、それらの英訳を網羅した先行研究はジェフリー・ブロー(Geoffrey Bullough)によってすでになされているが、材源を原文で読み解いて詳細に比較検討した研究はわが国ではほぼ皆無と言っても決して過言ではない。従って、廣田氏の研究のユニークさは、ラテン語やギリシア語の原文に直接当たって丹念に読み解き、それらを材源としたシェイクスピアの詩的想像力の巧みさがいかなるものであったかを綿密に論証したところにある。

対象として取り上げた作品は、シェイクスピアの詩の中から『ソネット集』(*The Sonnets*)、戯曲からは『ヴェローナの二紳士』(*The Two Gentlemen of Verona*)、『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*)、『夏の夜の夢』(*A Midsummer Night's Dream*)、『ヘンリー四世・第2部』(*King Henry IV Part 2*)、『お気に召すまま』(*As You Like It*)、『あらし』(*The Tempest*)である。

本博論には独創性という観点から見て特筆すべき点が3点認められる。まず一番目として、数多いシェイクスピアの作品群の中から詩・喜劇・悲劇・歴史劇・ロマンス劇とバランスよく対象となる作品が選択されており、ほぼ全ジャンルにわたって一貫して西洋古典文学との綿密かつ緻密な比較検討がなされている点である。その結果、シェイクスピアが様々な西洋の古典作品を読破し、類まれなるインスピレーションにより自らの詩や劇の中にそのエッセンスともいえるべきものを巧みに取り込んでいることが判明する。わが国におけるシェイクスピア研究は劇作家が偉大であり、戯曲だけでも37と多作であるので大局的に捉えるのは困難である。それゆえ、「ハムレットの悲劇」研究といったような特定の一つの作品や、あるいは喜劇や悲劇など特定のジャンルに絞った研究や、日本文学への翻案に絞ったものなどが多い。そのような状況の中で廣田氏の研究は多岐にわたる対象作品を一貫して西洋古典文学と比較検討するものである。シェイクスピアの珠玉の作品群の中から作品に散りばめられた西洋古典文学の微妙な影響を丁

寧にすくい出し検証することによって、シェイクスピアの詩的想像力の巧みさを鋭い洞察力で解明している。英語圏の研究者でさえほとんど指摘してこなかった西洋古典文学への言及の中に、シェイクスピアの詩的想像力の源となる要素が潜んでいることを、さまざまなジャンルにわたり丁寧かつ緻密に論証した意義は極めて大きいと思われる。

特筆すべき二番目は、演劇研究に携わる者が決しておろそかにすべきでないことであるが、廣田氏がつねに舞台というものを意識してシェイクスピアの戯曲を論じているという点である。その最たる例が、第4章「ジュリエットの幼さ：マクミラン版バレエ『ロミオとジュリエット』におけるシェイクスピアとオウィディウス」に認められる。古典の材源からインスピレーションを得たシェイクスピアは、それを自らの劇に取り込みながら、オウィディウスの描く悲劇の大きさとジュリエットの幼さを対比させることにより、『ロミオとジュリエット』という作品が持つ悲劇性をよりいっそう壮大なものにしている。そのことが後世の芸術家を刺激し、バレエの舞台にさえも影響を及ぼしていると指摘する。そのようなさまざまなシェイクスピア劇のアダプテーションに接することができる我々は、その舞台からシェイクスピアの詩的想像力の巧みさを解明できる手が見つかることができると、廣田氏は言う。西洋古典文学とシェイクスピアの作品と舞台公演との間を往来しながら論考を深めてゆく姿勢は、舞台芸術に通暁している廣田氏に特有のものである。

三番目に特筆すべき点は、難解なラテン語の読みが正確かつ的確であるという点である。具体例を挙げると、第8章「希薄な空気のなかへ」：シェイクスピアの『あらし』とウェルギリウスの『アエネーイス』第4歌の論考がその好例である。その中で廣田氏は「希薄な空気の中へ」、言い換えると、跡形もなく消えるという意味の‘into thin air’という表現に着目している。この言葉はごく些細な前置詞句に過ぎないのだが、廣田氏はその中に『アエネーイス』第4歌に登場するメルクリウスという神の存在を読み取ろうとする。そしてそのメルクリウスを形容する‘in tenuem . . . auram’というラテン語の前置詞句の韻律分析から、ウェルギリウスがメルクリウス神を描くにあたっての意図（即ち、美しく静かで平和なものとしての死と生と眠りと覚醒を支配できる神としてのの）を読み取り、ラテン語の原文を読んでいたことが容易に推測できるシェイクスピアであれば、その意図に当然気付いていたはずだと慧眼に導かれた鋭い洞察力で論じているが、極めて説得力のある指摘である。通常では見落とすようなデリケートな表現に着目して、それが夢と眠りと魔術と目覚めが混然一体となる『あらし』という劇全体の大きなテーマに通じるものであることを綿密に論証したが、これは廣田氏の優れたラテン語の読解力の賜物であると言えよう。

エリザベス朝の英語が読めることは当然のことであるが、ラテン語の原文でシェイクスピアの材源を読みこなせる研究者は、我が国ではほぼ皆無であると言っても決して過

言ではない。特にラテン語を読もうとすれば、文法を理解していることはもちろん、韻律と詩型をよく理解している必要がある。というのも、母音の長短によって格が変化するのでその母音の長短はテキストには示されていないので、韻律を分析して判断せざるを得ない。必然的に古典語を原文で読むということは、それを詩のことばとして理解し、音と意味を正確に捉えなければならない。ソース研究の古典的名著であるブローの研究でさえ原語に当たらずすべて英語のみでなされている。そのような先行研究の現状において、廣田氏による本博論が国内外を問わず今後のシェイクスピアのソース研究に与える影響はきわめて大きく意義のある研究だと思われる。博士論文の独創性と研究領域への貢献度として以上3点を評価したい。氏が所属している日本比較文化学会や日本シェイクスピア協会等の学会員の間でも本博論の評価は高く、いずれ好意的な書評が出ることも大いに期待できる。

最後に今後の課題として次の2点について言及しておきたい。一つ目は、シェイクスピアの数ある作品群の中からバランスよく研究対象となる作品が選択されており、一貫して西洋古典文学との比較検討がなされている。しかしながら、廣田氏の好みもあると考えられるが、どちらかといえば喜劇作品が多く選ばれ悲劇作品はわずかに一作品のみということとは否めない。今後は四大悲劇と呼ばれる『ハムレット』、『オセロー』、『リア王』、『マクベス』等の大作についても興味深い論考がされることを期待したい。

二つ目は、廣田氏の学風とも言えるテキストの精密細緻な読みが高じた結果であるが、細かい読みが細かい分析にとどまり、作品の主要なテーマに結びつくようなもう少しスケールの大きな研究にまで展開できていない点は残念である。ラテン語を英語と同じように幅広く大量に読みこなすことは、相当な語学力を有するものにとっても極めて困難なことである。それは理解できるが、そこを乗り越えて西洋古典文学のもっと幅広い読みがあれば、論考にも更なる広がりや深みが出てくるだろう。今後もこの研究を継続され、国際学会という大きな舞台も視野に入れて、さらに大きく羽ばたいていただくことを期待したい。

以上のような課題は残るが、総合的に判断して、本論文が達成した学問的独創性と研究領域への貢献度はいささかも減じるものでないことは言うまでもない。

よって本論文審査委員会は、本論文を博士（英文学）としてふさわしい論文であると判断する。

試問結果の要旨

本論文についての公開口頭試問は、大学院関係教員、その他の教員、非常勤講師、大学院生等 9 名の出席のもと、令和 2 年 2 月 3 日(月)午後 3 時 10 分から概ね 2 時間近くにわたり行われた。最初の 60 分程度は論文の概要についてパワーポイントを用いて説明があり、その後十分な時間をかけて論文細部にまで及ぶ質疑応答とコメントが 3 名の審査委員とフロアからの 2 名との間で活発に行われた。論者の応答は的確であり、残された課題に関しても十分な理解を示し、今後の展望についての積極的な意欲を確認することができた。以上のように、口頭試問の結果は満足すべきものであった。

学力確認の結果の要旨

履歴書と研究業績表にもあるように、廣田氏の 26 年に及ぶ研究歴の間に単著 2 冊と共著 10 冊をすでに出版済みであり、英文学関連の学術論文は 16 本に及ぶ。このことから明らかなように、平成 5 年に博士後期課程単位取得満期退学後これまで継続してエネルギーに研究を続け、氏の研究業績は日本シェイクスピア協会、日本演劇学会、日本比較文化学会等でこれまで高い評価を受けている。すでにエスタブリッシュされた研究者であり、学位論文の内容に関する公開の口頭試問においても満足すべき結果を示しているので、学位論文審査委員会は改めて学力確認のための試験は不要であると判断した。

学位授与の可否に関する意見

以上の所見により、本論文は博士(英文学)の学位を授与するに値すると認められる。